

特別支援教育における授業の在り方 非認知スキル教育

公益社団法人 子どもの発達科学研究所
所長・主席研究員 和久田 学



© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

1

非認知スキルの重要性

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

2

非認知スキルの重要性

認知スキルと非認知スキル

認知スキルとは

IQ、教科の学力、知識量、記憶力、コンピュータなどの操作能力

非認知スキルとは

コミュニケーションスキル、創造力、批判的思考、
協調性、忍耐力、誠実さ、 など

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

3

3

非認知スキルの重要性

非認知スキル重視の時代に

極端な話、認知スキルは、コンピュータ、インターネット、
AIによって代替することができる。

一方、非認知スキルは、社会で生きていくために必須のスキルである。

非認知スキルの高さは、成人期の問題の予防、
Well-beingに関連があることがすでにたくさんの研究によって
証明されている。

© Child Developmental Science Research. | Confidential | 許可のない転載を禁止します

4

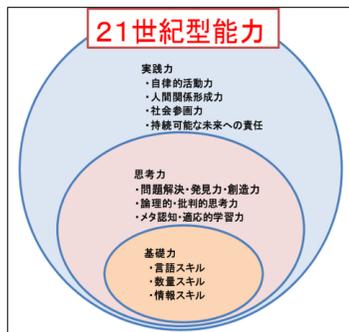
4

非認知スキルの重要性

国立教育政策研究所

教育課程の編成に生きる力の育成の
指針を「基礎」「思考」「実践」の
3層化する。

関する基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する 勝野頼彦
(国立教育政策研究所教育課程研究センター長)2013



非認知スキルの重要性

授業で何を身につけるのか？

`生涯学習、の時代に生きる子どもたちに教えるべきこと

- コミュニケーションスキル:必ずしも集団行動を意味しない。
学校において求められるスキルは特殊すぎるかもしれない。
- 学びのスキル: `読む、はおそらく必須。加えて `情報をまとめる、
`情報の真偽を確認する、 `情報を発信する、 `話し合いをする、など。
- 生活スキル:いわゆる身辺自立に加えて、清潔、ネット、金銭に関するスキル
- 職業スキル:作業の持続、指示に従った作業、報告、依頼(援助要請)、
作業の変更など。

非認知スキルの重要性

授業でどう身につけさせるのか？

- まず、身につけるべき行動を定義する。(非認知スキル)
- どの授業でも、同じ行動(非認知スキル)を同じように教える。
- 叱って教える、失敗から学ばせるのではなく、楽しく、ポジティブに、
褒めることで教え、定着させる。

そうすることで、一生使える、使いたくなるスキルになる！

ABC分析と授業

ABC分析と授業

行動を増やしたり減らしたりするために

ABC分析

- 原因(先行条件): Antecedent
- 行動 : Behavior
- 結果 : Consequence



ABC分析と授業

授業におけるABC分析

| A先行条件 | B行動 | C結果 |
|----------|------|-----|
| 発問・説明・指示 | 学習活動 | 評価 |

9

10

ABC分析と授業

授業におけるABC分析

- 私たちは、子どもの「学習活動」を増やしたいと考えている。
- そのとき、教師はどのような先行条件(A)と結果(C)を作ればよいのだろうか？

考え方 : 子どもの学習行動が見られないのは、教師側の問題

先行条件: わかりやすい指示、説明、ちょうどよい課題、時間…

結果 : 適切な行動への明確な強化刺激(ほめる行動)
不適切な行動に強化刺激を与えないこと

ABC分析と授業

指示に従えない子ども、困った子ども

ABCユニットを確認しよう。

その子どもに(教師が)させたい「**行動**」を決める。
難しすぎないか？(内容、時間)

その「**行動**」を起こさせるために必要な「**先行条件**」を作る。
教師の指示など、意図的なきっかけがあるか？

その「**行動**」が起こったら、すかさず「**結果**」を提供する。
その結果は、その「**行動**」を強化するものか？

ABCユニットは、小さくてかまわない。まず1つ作る！

11

12

自動化

自動化

自動化

- 私たちは脳は、同じことを何度も繰り返すと、「自動化」がなされる。

例: 歩く、文字を読む、運転する
着替える、挨拶する、
相手の気持を汲み取る、話を聞く、質問する
片付けをする、準備をする
文章から読み取る、計算をする
(怖いものから逃げる)

自動化

自動化の意義

- 自動化されたことは、習慣、癖、として一生、使うことになる。
- 人生の早期(子ども時代)に身につけた自動化行動は、その人の性格、行動パターンになる。
- 自動化は、非陳述記憶によってなされるもので、一度、作られた記憶は忘れにくく、変えにくいという特徴がある。

自動化

自動化すべき行動、 自動化する必要のない行動

| 自動化すべき行動 | 自動化する必要のない行動 |
|--|--|
| 気持の良い挨拶、愛想の良い笑顔 相手を気遣う言葉、パソコンやスマホの使用(タイピング、親指入力)、言葉の検索(信頼できるサイトの利用)、マナーのよい食事の仕方、健康的な習慣、清潔感のある身だしなみ、交通安全の習慣、大人の生活スタイル 非認知スキル | 形式的な挨拶(授業のはじめと終わり)、形式的な応答、黒板を一字一句ノートに書き写すこと、40分以上席に座っていること もしかしたら将来使わない可能性が高い学習内容……(書けないけど) |

授業における個性への対応： バッファ、感覚、自立課題

個性とは？

- 同じ教室にいる児童生徒が同じであるという前提はすでにない。
ニューロダイバーシティ(脳機能多様性)の時代。
様々な課題、特性のある児童生徒がいる可能性が高い。
- 一人一人をアセスメントをするのが大切ではあるが、はじめから様々な個性があることを前提に授業を行うという「ユニバーサル支援」の考え方が重要。
- 特に特別支援学級のように、複式である場合は、個性を前提に授業を組み立てる必要がある。

このとき、重要なのは、**児童生徒を群で捉えること。**

どのような群がいるのか？

いくつかの軸で考える

- 知的発達：一つの教室に、1～2年の発達の差があってもおかしくない。
- 感覚特性：視覚、聴覚、触覚などの感覚の過敏や鈍麻、視覚処理が得意、聴覚処理が得意など。
- 活動時間：短時間で集中力が切れる子、逆に途中でやめられない子。

個性への対応：バッファを作る

バッファとは「緩衝材」の意味。

- いきなり「みんな一緒」を求めない。
- 「みんな一緒」をしやすい活動、みんなが無理なく楽しめる活動（遊びでも良い）をリストアップしておき、それを活動のバッファとして使う。（主活動の前、急に空いた時間を埋める、集中力の切れ目を埋める）
- 目標についても、バッファを含めておく。つまり「できると素晴らしい」目標だけでなく、「とりあえずここまでできればよい」目標を含めて考えておく。

個別性への対応: 感覚を利用する

私たちは(子どもに限らず)、感覚の影響をまろに受けている。

- 感覚刺激は、脳の切り替えを促す。
(集中力の低下、感情コントロールの問題があったときに)
- 感覚刺激=活動。つまり活動が少ないと、問題行動が起こる。活動を作り、感覚刺激を入れ続けられるようにすると、子どもは落ち着く。
- 感覚刺激は、特性を超えて共有できる可能性がある。
- ただし感覚過敏がひどい子どもは難しいところか、傷つき体験になる可能性があるので、あらかじめ対応しておく。

個別性への対応: 自立課題(TEACCH)

自立課題とは、
一人で最後まで行うことができる課題を意味している。

- 自立課題は、学習である必要はない。パズル、パソコンゲーム、絵を描く、作業をするなど、何でも良い。大切なのは、一定時間(数分でもOK)、一人で静かに過ごし、終わったら報告ができる、ということ。
- 自立課題があればを作ることができれば、自習ができることになる。
- 自立課題では、成功体験が鍵になる。
- 自立課題が複数できれば、それを組み合わせて長い時間の自習が可能になる。

まとめ

- 授業は、授業らしくやることが目的ではない。
- 授業は、子どもの学習活動である。
そして、成功体験を提供しなければならない。
- 授業では、システムを作ることが重要。システムは、自動化され、子どもたちも教師も、楽しくて充実できて、気楽な時間が過ごせるようになる。
- 授業が落ち着けば、それ以外の活動にエネルギーを注ぐことができる。